

# 国保直診の 看護現場から

第32回

## 地元のみならず “ここでの健康で生きがいある暮らし”を 続けていくために

静岡県・浜松市国保佐久間病院看護部長 おおくこ 大國護洋子

### 佐久間町って、こんな所

長野県から静岡県に至る南アルプスの深南部、静岡県北西部にある佐久間ダムを経て、天竜川の流れている。<暴れ天竜>と呼ばれたこの川。その名の通り「龍が天を上るがごとく」暴れ曲がってくねって、回り込んでいる。山々が複雑に入り組んでいるため、水の流れが龍になった。そんな山深〜い谷間の天竜川

のほとりに私たちの佐久間病院がある。

「戦後の土木技術の原点」といわれた佐久間ダム。かつては日本一の発電量を博していた。昭和30年前後、ダム建設当時の町はとても賑やかだったそうだ。人口は1万人を優に超え、現在の約4倍の人で溢れていた。唯一の映画館・ホールもあり、その一角に診療所があった。昭和36年になって、その敷地に町民の願望であった佐久間病院が建てられた（平成16年6月、新病院に改築 図1、写真1）。

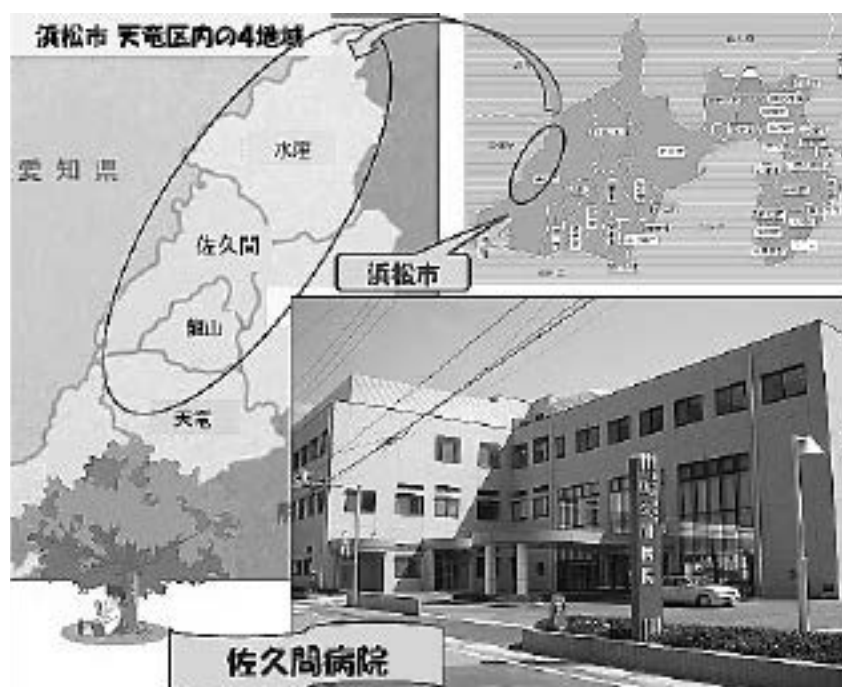


図1、写真1 新病院



写真2 改築前の古びた建物



写真3 院長が渡った川原

佐久間の夏は暑い。“日本で一番暑い町”として何度も全国ニュースに登場した。川に乗って吹く風はちっとも感じられない。毎年6月にアユ漁が解禁となる。「待ちました」とばかりに多くの釣り人が各地から訪れ、朝早くから夕方まで1日中、夢中になってアユをねらう。日本一の炎天下の下、上半身を太陽にさらし、下半身は冷たい（ぬるい？）水の中。それも川の流れと闘いながらである。

釣りの醍醐味がわからない自分にとっては「身体によくないよ～」と思いつつ、“夏が来た～!”とウキウキ気分、明るい陽射しの方を見る。「また釣った、すごい！ 上手いねえ」「どれどれ、ほ～」「跳ねた、跳ねた！」釣り人たちの間をぬって、魚が飛び上がる。病室の窓から、患者さんと一緒に銀色に光る景色をふっと眺めるのが心地よい。とはいえ毎年、体調不良や自分自身を釣ってしまったと病院を訪れる釣り客が2～3人はいる。

## 佐久間病院の看護師のお仕事～思い出～

ある夏の土曜日。深く心に残る懐かしい光景を思い出す。まだ、改築前の古びた建物（築36年ほど経過）であった（写真2）。その日、私は日直勤務をしていた。事務当番は新人の薬剤師、宿直のおじさんもいた。突然、防災無線でやり取りする会話が入ってきたそう。たまたま、そこに居合わせたのが若き日の三枝院長だった（休みなのに）。無線からの情報は、天竜川に来ていた釣り人が意識を失い倒れていたところを発

見され、救急要請。現場に向かう救急隊と消防団の会話だった。その頃の救急隊は、役場の職員が自宅待機で担当し、運転はガソリンスタンドのおじさん等が呼び出されていた。「医者来させたほうがいいぞ」「ダム放流、止めるように連絡してや」などの言葉が飛び交っていたようで、緊張しながら耳を傾けていた三枝先生が苦笑していたと薬剤師の沙織さんが教えてくれた。要請を受け、さっそく先生と一緒に現場まで送ってもらった。病院から3kmほど離れた県道に降ろされた。川は30mほど崖下にあった（写真3）。それも山肌には杉の木が林立している。明治以降、盛んに杉の植林が行われ、日本3大美林の一つといわれた天竜杉の北端に位置する一帯だ。地元の森林組合が管理しているが、夏という時期であり、かなりの下草も生い茂っていた。

無線を持った消防団員から「こっち、こっち」と手招きされた。これから谷底へ降りていくのだ。先生は小走りにその方向へ走って行った。道なき道（たぶん、獣道？）と思われるガードレールの向こう側へと案内された。いざ、私も続こうとすると「そりゃ駄目だわ！」と一声。止められた。そうだった、自分の恰好といったらワンピースの白衣にナースサンダル。薬を詰め込んだ重い往診カバンを持った無防備な姿。現在のユニホームと違い、ズボンもシューズも履いていなかった。

その時初めて、そこを下りて行く自分を想像し、背中がゾワッとしたのだった。「ここで待ってて！」と、返事を返す間もなく先生は勢いそのまま崖下へと下り

て行ってしまった。急いでカバンを団員に渡した。「先生、滑らんでよ。大丈夫かや?」と思いながら白衣の後ろ姿を見送った。アツという間に白い背中、薄暗い木立と草むらの中に溶けて消えてしまった。自分の周りが何事もなかったかのように急に静まり返った。下の方から話し声も音も何も聞こえない。もちろん、右にも左にも民家はない。「さあ~どうする、どうなる?」と考えながら、何かしらの連絡を待った。

どれくらい経ただろうか、一人の団員が上がって来た。この崖だと患者さんを上げられない。対岸の川原に救急車を付けるため、川を渡ることになったという。この辺りにそんな場所あったっけと考えた。しかも患者さんをゴムボートに乗せ、4人ほどでボートを押していくという。もちろん先生も一緒に。ということ、白衣のまま水の流れに身を投じるといことか。頭の中が焦った。「病院に戻って、受け入れの準備をするように」との伝言を受けた。「患者さんの状態は?」「救急車より早く戻らなければ」「先生が川を渡る!?!」「どーする、どーする着替えは?」さまざまな思いが駆け巡り、真剣な顔でボートを押し川の中を進んで行く先生の姿が頭をよぎった。そこで私の記憶は途切れている。

病院で迎えた先生の姿は予想に反してデロデロになっていなかったと思う(水も滴る!……ではなかった)。今回、執筆するにあたって院長との話ではっきりした。腰から下が入水。ポケットの財布と靴がズブ濡れで使えなくなったこと。そして私から一言「先生は救急車に乗って来れて良かったね!」と恨めしそうに言われたそう。そう、私は現場から日本一の真夏の日差しの中、ゼイゼイしながら走って歩いて病院へ戻っていたのだ。暑い暑い佐久間の夏の思い出だ。

平成16年11月、佐久間地域に天竜消防署・佐久間分署が開設された。それ以前は自主防災の消防団のみで佐久間を守ってくれていた。素人であるが、地域の消防団員として活躍している職員も多かった。そのため、救急に医師や看護師の出動する機会が多くあったのだ。大病院への搬送には看護師のみの同乗が多く、夜勤帯に“片道1時間半の道のりを”2往復することも

あった。搬送中の幾多の緊急事態に対処するたび、強く優しいド根性ナースへと成長できたと考えている。現在も消防団は健在である。当院のナースマンとリハビリの4名は団員である。消防の訓練に参加し、夜の酒宴も担当している。

## 佐久間病院の活動 ~今~

### 1. みんなでまち歩き!

地域の方々の顔が見えるからこそ、自然に飛び込んで行ける。看護部では、平成7年から町内4地区へ出向いて講座を開催してきた。毎年内容を変え、在宅での介護の方法や健康体操など。その後、年2~3回の病院主催の健康講座へと変化した。また、“もっとも地域を知ろう!人々の力をいadakou!”と院長の提案で、「佐久間のむか~し昔をよく知る大先輩たちに教えてもらおう~(ゆっくりゆる~り・まち歩き・さくまを再発見)」と題し、地域を散策する企画が始まった。現在までに4つの地域を歩いた。

その地区の大御所・重鎮たちが長い間、写真を収集し文献を紐解き、研究し温めてきた地元の歴史を教えてください。意気揚々と資料をまとめ地図を用意し、一緒に歩いてくださった。長く暮らしてきた故郷「佐久間」のこと、実は何も知らないことだらけだった。病院スタッフと外へ向けても回覧板や掲示などで募集をかけた。毎回、総勢20人ほどが集まり、山やら川やら町の中をトレッキングして回った。もちろん、先頭に行くのは重鎮さんだ。

### ①浦川地区を知ろう

昔、この地域の中心には川が流れていた。この地を活かそうと皆で力を合わせ、山を拓き川の流れを変え生活できる土地に整えていったそう。掛かる橋の由来にも物語がある。続いて山の中腹まで登った。そこから見る家並みに心が潤んだ(写真4)。車のない時代、険しい道を超え、多くの人々が町を行き交った。賑やかに掛け合う声が聞こえてきそう。

旅役者の公演が唯一の楽しみだった時代もあったよ



写真4 家並み



写真6 河内川(厚血川)



写真5 漢方薬

うだ。人気の歌舞伎役者の礎が立っていた。昼食で訪れた店には、町で唯一の診療所で使っていた漢方薬が残されていた(写真5)。どれも浦川の歴史が満載だ。説明して下さるIさんの自慢気な顔が忘れられない。これを懐かしき「古き良き時代」というのだろう。

## ②佐久間地区を知ろう

山の仕事は杉の植林と伐採ばかりではない。猪や鹿を狩り、麓の川まで下ろし川辺で皮を剥ぎ解体する。すると獣に付いていた山ダニが、一斉に生きている人間に向かって寄って来るのだそう。背中がぞよめいた。

昔、この川の上流では天野氏と奥山氏という豪族同士が土地をめぐり争いがあった。清い水の流れは真っ赤に染まり、それはそれは壮烈な闘いだったようだ。今は「河内川」と書くのだが、名前の元の由来は「厚血川」だそう(写真6)。衝撃の事実だった。描ききれない深～い茶色の世界を想像している自分がいた。平然と語って下さるSさんに尊敬の目を向けた。

もっと知りたい、感心しきりだった。

## 2. みんなで取り組む・防災対策

### ①川合地区の防災マップを作ろう

平成29年9月9日、川合地区へお邪魔した。地域の自主防災組織、消防団、民生委員さんとともに医療・介護機関と行政が加わり、災害に備えるための支援について検討した。地域住民と防災支援チーム(5~6人)を結成し、地区内の“まち歩き”を行った。避難の時「安全に道が通れるか」「危険な箇所は?」「車いすの場合のルートは?」、日常、利用している道を点検して回った。各お宅から避難所(公民館)までの移動方法を考える。その情報を地図に書き込み、地域オリジナルの防災マップを作成した。一緒に歩き話し合うことで、地域の特性を再認識し住民とつながることができた。防災に対する意識が高まったとの声が上がった(写真7、図2)。

### ②個別援助計画を試行してみる

マップ作りを経て平成29年12月4日、この地区の防災訓練に参加した。9時00分の防災サイレンを合図にチームに分かれ、担当した高齢者を迎えに行く。私たちが伺ったOさんは92歳。避難所から1kmほど山を上った中腹にお宅がある。息子さん夫婦と3人暮らし。以前、奥さんのケアマネジャーとして毎月訪問していた。7年ほど前のことだ。その頃のOさんからするとだいぶ足腰の様子は衰えている。しかし、気持ちはすこぶるお元気だ。

「お久しぶりです」とご挨拶をし、こちらへと手招きした。「そーか、そーか。外へ行くだか？」と座卓テーブルから立ち上がる動作が心もとない。玄関へ段差を2段。歩いて降りる様子は転んでしまいそうだった。「あんじゃないよ」と本人はいたって自信満々だ。前転しそうになりながら靴を履き、伝え歩きで敷居をまたいで外の椅子に座った。Oさんのいつもの特等席だ。やや息切れが気になったが「こんきかないね！」(息苦しくない)と意気軒高だった。そこから駐車場まで約10m歩いて終了した。お嫁さんの立ち合いの下、ほとんど見守りであるが、課題点を挙げた。

実際の援助の方法や日中一人での対応、自力で動けない時はどうするか。避難所までの道が崩れてしまうことも考えられる。その後Oさんを残し、お嫁さんとご近所さんと一緒に山を下り避難所へ到着した。



写真7 集合写真

た地域の大勢の人たちが集まって、40~50人ほどとなっていた。どの顔も見たことある人たちだ。課題はたくさんある。改めて自分たちの住む地域がどんな状況かわかってきた様子だ。

## ここで暮らし 看護の仕事が続けていくということ

佐久間病院は入院60床の田舎の病院であるが、小さいがゆえに地元に着した「顔の見える関係」をつなぐことができる。訪問看護や医療・福祉・介護の連携ばかりでなく、「地域の中で協働する活動」が私たち・佐久間病院の特徴といえるだろう。

地域で福祉活動を行っている大先輩の方々も多くおられる。相月地区では住民の結び付きを強くするため、「相月分校」を開校している。校長先生(区長)や学級委員長・委員(活動できる70代の壮年・婦人)と生徒(高齢者)で構成。外に出ている子ども世代は父兄である。毎年お邪魔する「夏の授業」では、心若いハツラツ生徒さんたちから「ほい、元気だか?」「今日は、ありがとね!」と励ましとエネルギーをいただくのだ。

これからも多くの地域福祉活動に顔を出し仲間に入れていただきながら、佐久間人として“佐久間のナース”として、積極的に地域にアプローチしていきたい。

図2 手作り防災マップ

